

日南市教育研究所

I	研究主題・副題	3-1
II	主題設定の理由	3-1
III	研究目標	3-2
IV	研究仮説	3-2
V	研究内容	3-2
VI	研究の全体構想	3-3
VII	研究組織	3-3
VIII	研究の実際	
1	学習指導過程に関する内容	3-4
	(1) 知識や技能を習得し活用する授業	
	(2) 「学習問題」と「答え」または、「めあて」と「まとめ」が対応している授業	
	(3) 児童生徒の実態や教材の特性をつかみ、指導方法を選び実践して、見届けを行う授業	
2	授業中の教授活動に関する内容	3-6
	(1) 発問の工夫	
	(2) 板書の工夫	
	(3) 考える時間を確保するための手立て	
	(4) 評価の在り方	
3	言語活動の充実に関する内容	3-8
	(1) 言語活動授業プランの作成	
	(2) 発達の段階に応じた言語活動	
IX	成果と課題	3-10
	〈参考文献〉	
	〈研究同人〉	

I 研究主題

児童生徒の豊かな学力を高める指導方法の工夫改善
～ 日南市における授業モデルの構築と実践を通して ～

II 主題設定の理由

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われている。このような時代において、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことがますます重要になっている。今回の学習指導要領の改訂の基本方針の一つに「知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを重視すること」が挙げられ、確かな学力を育成することが重要であると述べられている。

日南市では、「夢と創造と感動の日南教育」をスローガンとして「新しい時代を積極的に切り拓く心身ともに調和のとれた人間の育成」を目指している。その中で、小・中学校9年間を見通した一貫性・連続性のある小中一貫教育を展開しながら、本市の地域性を生かした日南市ならではの「振徳教育」を推進し、その最重要課題である学力向上に取り組んでいるところである。

本研究では、過去2年間、「キャリア教育の在り方」や「デジタル教科書を活用した授業の在り方」と先進的な研究を推進し、その成果も見られた。

そこで、本年度はさらなる学力向上のため、本市の小・中学校の教員を対象に「授業に関するアンケート」を実施し、学習指導の現状を調査したところ、次のような結果が得られた。

◎ 学習指導過程に関する質問

(ア：常に行っている イ：行っている ウ：あまり行っていない エ：行っていない)

質問項目 / 選択肢	ア	イ	ウ	エ
1 本時の目標を明確にした授業を行っているか。	27%	70%	3%	0%
2 目標に対応した「まとめ」をしているか。	12%	64%	23%	1%
3 問題解決的な授業を行っているか。	9%	56%	33%	2%
4 目標内容に応じて「教える」「考える」場を位置付けた授業を行っているか。	13%	78%	9%	0%
5 定着を図る場面と確実な見届けを行っているか。	12%	69%	19%	0%

◎ 授業中の手立てに関する質問

(ア：常に行っている イ：行っている ウ：あまり行っていない エ：行っていない)

質問項目 / 選択肢	ア	イ	ウ	エ
1 児童生徒の思考を促したり深めたりすることを意識して発問しているか。	12%	70%	17%	1%
2 児童生徒の思考の足跡が分かる板書をしているか。	6%	52%	38%	4%
3 児童生徒が本時の目標を達成したかを把握するための評価活動を行っているか。	6%	47%	43%	4%
4 授業中、児童生徒に自分の考えを持たせる場面を設定しているか。	13%	72%	14%	1%

◎ 言語活動に関する質問

(ア：常に行っている イ：行っている ウ：あまり行っていない エ：行っていない)

質問項目 / 選択肢	ア	イ	ウ	エ
1 言語活動を意識して、授業を行っていますか。	17%	61%	20%	2%

以上のアンケート結果を分析すると、どの質問項目においても、「常に行っている」「行っている」と答えている教員の割合が高いことが分かる。しかし、「常に行っている」と答えている教員

だけを見ると、6%～27%に留まり、児童生徒の学力向上を目指した一般的に理想とされる授業展開を常に行っている教員は少ないと言える。また、各質問項目の評価基準もそれぞれの教員で格差があることが考えられる。さらに、アンケートの自由記述の中には、「問題解決的な授業をすると計画した内容が時間内に終わらない。」「発問の仕方に困っている。」「板書の仕方が難しい。」「評価の仕方が分からない。」「考えさせる時間が十分確保できない。」などの授業における多くの悩みも寄せられた。このことから、日南市の教員が授業で抱える悩みを解決し、常に行えるようなスタンダードな授業モデルが必要ではないかと考えた。

そこで、本年度、本研究所では、児童生徒の学力向上と教師の授業力向上を目指して、日南市におけるスタンダードな授業モデルについての研究を行うこととした。また、本研究内容を深め広げていくために、授業協力員を募集し、研究内容に基づく実践事例を収集することにした。これらを通して、本市の掲げる“日南ならではの教育「振徳教育」”の「豊かな学力を身に付け、未来への夢や志をもつ子ども」の育成を図っていききたい。

Ⅲ 研究目標

- 児童生徒の学力向上と教師の授業力向上を目指して、日南市におけるスタンダードな授業モデルを究明し構築する。

Ⅳ 研究仮説

- 知識や技能を習得し活用する授業の学習指導過程の在り方を究明し、授業モデルを明確にすれば、本市教員の授業改善が図られ、児童生徒の学力向上につながるであろう。
- 発問の在り方や板書の仕方など、授業における教授活動について究明し明確にすれば、本市教員の授業改善が図られ、児童生徒の学力向上につながるであろう。
- 授業における言語活動の捉え方や取り組み方を明確にし、ねらいや育てたい力に合わせた効果的な取組を行えば、本市教員の言語活動に対する意識が高まり、授業改善が図られ、児童生徒の学力向上につながるであろう。

Ⅴ 研究内容

1 学習指導過程に関する内容

- 日南モデルの授業展開の構築
 - ・知識や技能を習得し活用する授業
 - ・「学習問題」と「答え」または「めあて」と「まとめ」が対応している授業
 - ・児童生徒の実態や教材の特性をつかみ、指導方法を選び実践して、見届けを行う授業

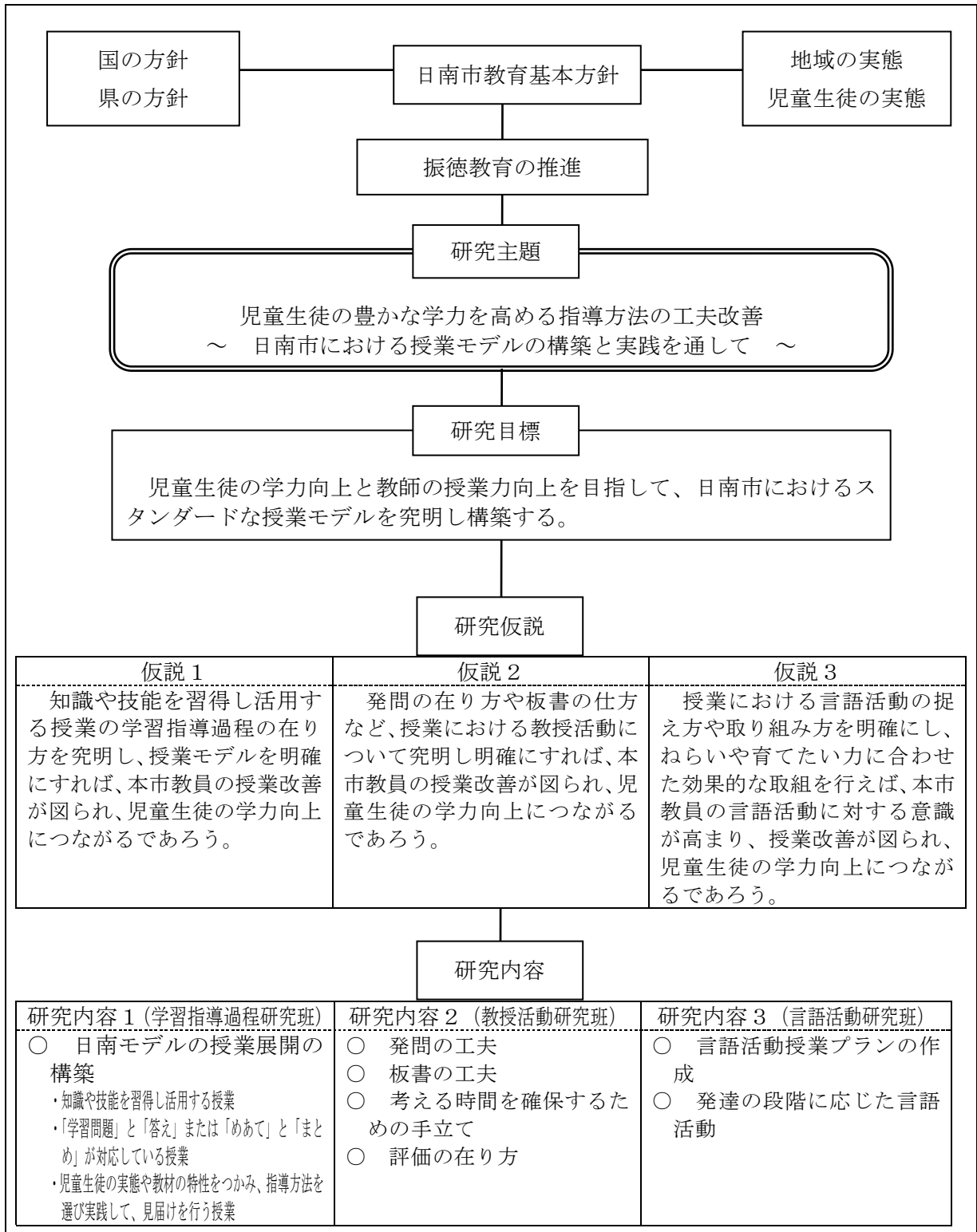
2 授業中の教授活動に関する内容

- 発問の工夫
- 板書の工夫
- 考える時間を確保するための手立て
- 評価の在り方

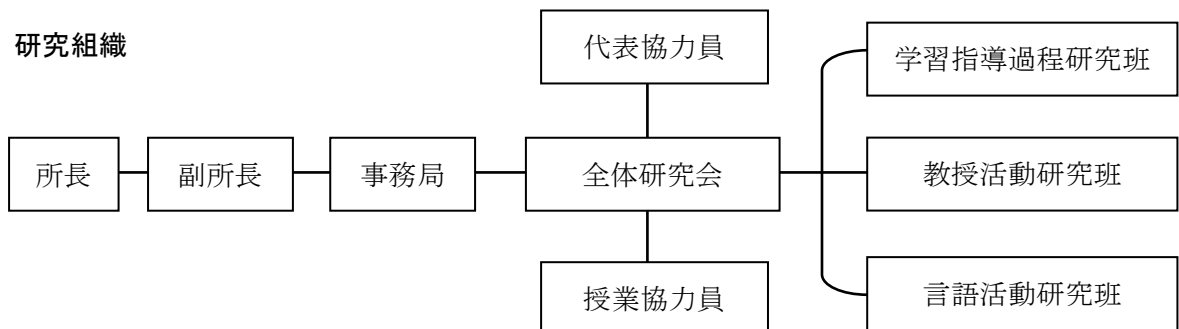
3 言語活動の充実に関する内容

- 言語活動授業プランの作成
- 発達の段階に応じた言語活動

VI 研究の全体構想



VII 研究組織



Ⅷ 研究の実際

1 学習指導過程に関する内容

児童生徒の豊かな学力を高めるために、市内の全教師が普段に実践できるスタンダードな授業モデルを「日南モデル」の授業と定義し、以下の点に留意した授業づくりを目指すことにした。

(1) 知識や技能を習得し活用する授業

児童生徒が知識や技能を活用するためには、断片的な知識ではなく、「～なのは～だから」という概念的な知識を習得させることが大切である。そのために、身に付けさせたい知識に応じた問いをもたせながら、習得や活用を意識した授業づくりを行っていく必要がある。そこで、「問題解決的な授業展開」と「教えて考えさせる授業展開」を「日南モデル」における基本的な授業展開とし、身に付けさせたい力に応じて選び、実践することにした。

(P 3 - 5 参照)

(2) 「学習問題」と「答え」または「めあて」と「まとめ」が対応している授業

「日南モデル」の授業は、「学習問題」に対する「答え」が明確になっている授業を基本としている。「めあて」を立てる場合においても、児童生徒に対し、明確な「学習問題」が設定されていることが重要である。しかし、「学習問題」が設定されていなく「めあて」だけの授業展開では、活用につながる十分な知識や技能を習得させることにはつながりにくい。そこで、本研究所では、学習問題を設定するための4つの視点を意識しながら設定することにした。

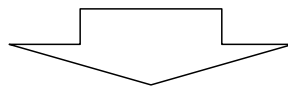
○ 解決可能・二者択一的	→ 調べることが明確な問いになっているか。
○ 学習指導要領の内容	→ 身に付けるべき学習内容が組み込まれているか。
○ 問題解決の資質・能力	→ 問題解決の資質・能力の育成が図られるか。
○ 追究の見通し	→ 見通しをもって追究できるか。

【学習問題を設定するための4つの視点】

(3) 児童生徒の実態や教材の特性をつかみ、指導方法を選び実践して、見届けを行う授業

本市教員対象のアンケートに「計画した内容が時間内に終わらない」という回答が寄せられた。その課題を解決するためには、「何を身に付けさせるのか」というねらいや目標を明確にし、そのための「児童生徒の実態や教材の特性はどうなのか」、「どの程度身に付いたのか」という指導と評価のサイクルを意識した授業実践を行うことが大切であると考え。以下に「日南モデル」の授業づくりの手順を示す。

- ① 児童生徒の実態把握
レディネスや既習事項とのつながりに留意する。
- ② ねらいや本時の目標の明確化
身に付けさせたい知識を明確にした「まとめ」を作成する。
- ③ 身に付けさせる知識に対応した「問い（学習問題）」の設定
「まとめ」に対応した「学習問題」や「めあて」を設定する。
- ④ 指導過程の作成
習得に力を入れるのか、活用に力を入れるのかはっきりさせる。



「日南モデル」の授業の実施と見届け

【「日南モデル」授業づくりの手順】

【日南モデルの授業展開例】

(1) 児童生徒のゴールイメージ

基礎的・基本的な知識を身に付け、それを活用することができる児童生徒

(2) 基礎的・基本的な知識、活用力とは

基礎的・基本的な知識	例	⇒	活用力
① 簡単な知識	「～は～だ。」		「～なのは～だからだ。 だから～できる。」
② 構造的知識	「～している。」「～になっている。」		
③ 説明的(概念的)知識	「～なのは～だからだ。」		

(3) 「日南モデル」の学習指導過程

本時の目標と評価の明確化
「この学習で身に付けさせたい力はこれだ」

① 問題解決的な授業展開 (例)

段階	学習活動の流れ	子どもの思考の流れ
つかむ (問題設定)	○ 興味・関心や問題意識を高め、自分なりの課題をもつ。 学習問題 ○○○○○○○○○○	「～は～だ。」 「～は～になっている。」 ↓ 「なぜ～なのだろう。」
見通す (予想・仮説設定)	○ 既習や経験したことなどに基づき、結果や解決のための見通しをもつ。	「～なのは～だからかな。」 ↓ 「～なのは～だからだ。だから～をして確かめる。」
追究する (検証)	○ 自分なりの方法で問題を追究する。 ○ 互いの考えを表現し合いながら、考えを深め、広げるなど、集団で問題を追究する。 ○ 結果をもとに「答え(結論)」を導く。 答え(結論) ○○○○○○○○○○	「～は～だ。 ～は～だ。 だから～なのは～だ。」 ↓ 「～なのは～だからだ。」
まとめる (まとめ)	まとめ ○○○○○○○○○○ ○ 追究した結果をまとめる。(一般化)	(活用力) 「～なのは～である。だから、～も～だ。」

② 教えて考えさせる授業展開 (例)

段階	学習活動の流れ	子どもの思考の流れ
教える	○ 基本事項について、教師の説明を聞く。 めあて ○○○○○○○○○○	「～は～なんだなあ。」 「～は～になっているんだなあ。」 「～なのは～だからなんだなあ。」
考えさせる	理解の確認 理解確認課題 ○ 「基本事項が理解できているか」についての課題に取り組む。 ○ 分かったことをお互いに説明したりする等の教え合い活動を行う。	「確かに～は～になっているなあ。」 「確かに～なのは～だからだなあ。」
	理解の深化 理解深化課題 ○ 「基本事項を応用できるか」についての課題に取り組む。 ○ 小グループによる協同的問題解決の場において、問題解決に取り組む。	「～なのは～だからなんですよ。」 「～なのは～なんだから、～することもできる。」
ふりかえる	まとめ ○○○○○○○○○○ ○ 「授業でわかったこと」「むずかしかったこと」「よく分からなかったこと」等について自己評価を行う。	「～なのは～だからだ。」 ↓ (活用力) 「～なのは～である。だから、～も～だ。」

※ 自力解決・共同解決を通して、児童生徒が自ら知識や技能を概念的に理解していく過程を重視した学習指導過程

※ 既習事項や教師からの説明から得た知識や技能を活かして、それらを深化させたり活用したりすることを重視した学習指導過程

定着を図る場面と確実な「見届け」

- ① 「この学習では、○○が分かった(できるようになった)」
- ② 「この考え方を利用して、さらに○○を考えてみよう」

2 授業中の教授活動に関する内容

児童生徒の学力を高めるためには、教師の指導力の向上が不可欠である。そこで、教師の授業における教授活動について整理し、指導力を高めるためにどんなことに留意しなければならないかについて研究を進めることにした。

(1) 発問の工夫

ア 発問の意義と重要性

発問とは、児童生徒に思考を促すための行為であり、児童生徒の理解力や思考力を育てるために、教師が問いの形をとって質問することである。児童生徒の理解力や思考力を育てるためには、「何をどのように考え、理解させるのか」という指導観を明確にもち、発問を準備することが必要である。児童生徒にゆさぶりをかけ、「なぜだろう」「どうなっているのだろう」など、考えずにはいられないという状態にさせる発問を工夫しなければならない。

そこで、発問を考える際のポイントを次のように設定した。

<発問のポイント>

- | |
|--|
| ○ 何を問うているのかがはっきりしており、児童生徒が何を考えればよいのかがよく分かる発問をする。 |
| ○ 児童生徒の思考や認識をゆさぶる発問をする。 |
| ○ 一問一答ではなく、多様な反応がある発問をする。 |

イ 発問計画の立て方

児童生徒の思考を促し、深める発問をするためには、教材研究及び授業準備の段階で発問計画を立てることが必要である。

<発問計画作成の手順>

手 順	留 意 事 項
1 指導目標・内容を設定する。	○ 指導目標を設定し、指導する内容を明確にする。
2 教材を分析・解釈する。	○ 教材を分析し、教師自身が疑問や課題をもつ。 ○ 教えなければならないことや教えたいこと（正解）を明確にする。
3 教材についての児童生徒の実態を把握する。	○ 児童生徒の「知らない」「できない」状態を具体的に知る。 ○ 「知らない→知る」「できない→できる」過程を考える。
4 発問をつくる。	○ 授業場面を想定し、実際に児童生徒に問いかける形で発問をつくる。 ○ 発問のねらい、発問に対する正解を整理する。
5 発問に対する児童生徒の答えや反応を予想する。	○ 児童生徒の多様な反応を予想し、それらに対する「切り返しの発問」を考える。

<発問カードの実践例>

教科・単元	4年算数「小数」
発 問	0.01と0.001は0.001の方がけたの数が多いから大きいね。
正 解	0.01 > 0.001
ねらい	0.01と0.001では、0.001の方がけたの数が多いので大きいととらえる児童がいると考えられる。そこで、誤答をあえて投げかけることで小数の意味を深く考えさせる。

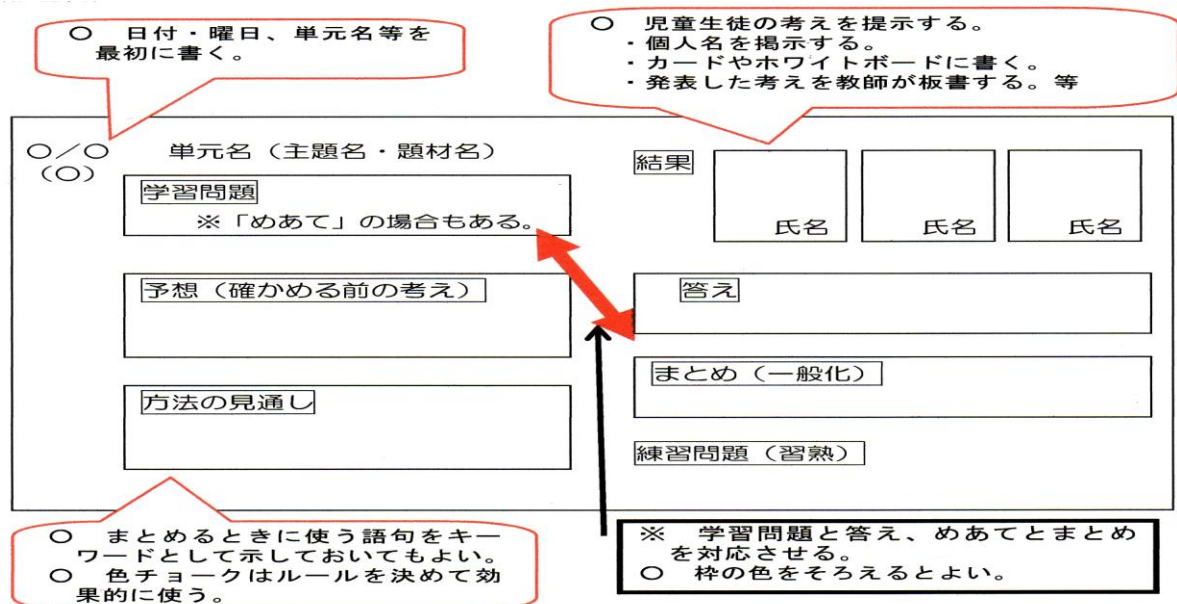
<学習指導過程における発問計画の実践例>

	学習内容及び学習活動	主な発問・指示 (○) 予想される児童の反応 (・)
考える 15分	3 山場の場面での主人公の気持ちの変化を読み取る。 (1) 個人	○ 主人公の気持ちが大きく変化するの、文章構成ではどの場面ですか。 ・ 山場の場面 ○ 山場の場面で主人公は、どのような思いをしたでしょう。
深める 20分	4 設定と結末での主人公の人物や性格を比べる。	○ 設定と結末で主人公の人物や性格が変わったものと変わっていないものをまとめてみましょう。 ・ 変わったもの →紙くずのような顔 ・ 変わっていないもの →性格・態度

(2) 板書の工夫

板書とは、学習内容や児童生徒の思考・活動の流れを見やすいように示したものである。板書は、指導内容を視覚的に児童生徒に提示し、共通の認識や十分な理解を図るために大切である。効果的な板書のポイントを以下に示す。

<板書例>



(3) 考える時間を確保するための手立て

「問題解決的な学習」「教えて考えさせる学習」とともに、児童生徒に考える時間を十分に与えることが必要である。授業の中で、無駄な時間を省き、児童生徒の活動目標を明確にすることによって効率よく学習活動を行わせることができる。そのためには、内容を吟味し、分かりやすく明確な指示・説明を行わなければならない。そこで、効果的な指示・説明のポイントを次のとおり設定した。

<指示・説明のポイント>

- あらかじめ説明が少なくすむような手立てを事前にしておく。
※ 前もって新出漢字を学習したり、言葉調べをしたりして授業に入る。
- 本時の学習内容を明確にする。
- 具体的な指示をする。
- 活動に入る前に、本時の学習の流れ(例：一人調べ→ペア→全体)等を示すことで、学習の見通しをもたせる。学習の進め方を見通しをもたせる。
- 活動させながら指示するのを避ける。

(4) 評価の在り方

本研究所では、評価を「児童生徒の理解度をもとにした指導・改善の手立て」の一つにとらえ、研究を進めた。特に、本時の目標に到達したかどうかを把握し確認するための評価は、自己の指導を振り返り、成果や課題を明確にすることでその後の指導に生かすことができるという点で、毎時間必ず行う必要がある。評価の方法として、以下のような方法が考えられる。

<理解度を評価する方法>

- 練習問題から理解度を評価する。
※ 学習内容が身に付いているかどうかを把握できる。
- 誤答から理解度を評価する。
※ つまずきの原因等を把握し、自己の指導を改善できる。
- 授業後のノートから理解度を評価する。
※ 児童生徒の思考の様子や理解度を把握できる。
- 授業後の「振り返り」から理解度を評価する。
※ 自己評価 (分かったことやできるようになったこと) から、本時の目標の到達度が把握できる。

3 言語活動の充実に関する内容

言語活動は目的ではなく、教科目標や単元目標を達成するための一つの手段である。しかし、本市教員の言語活動に関するアンケートによると、「話し合い活動＝言語活動」という意見が多数を占めており、言語活動の捉え方や取り組み方の相違、言語領域に偏りがあるという結果が得られた。また、「言語活動の進め方が分からない」という言語活動を行う上での悩み等が数多く寄せられた。

そこで、各教科等や各単元等において効果的な言語活動を見いだすための具体的な方策が必要であると考え、単元または一単位時間の言語活動を構想するための言語活動授業プランと発達の段階に応じた言語活動について研究を進めてきた。

(1) 言語活動授業プランの作成

言語活動授業プランは、ねらいや育てたい力に合わせた具体的かつ効果的な言語活動を展開するために、何をどのように取り進むかを明確にするものである。これを作成することで、教員が同じ認識で授業を展開できるようになり、充実した言語活動が実践され、児童生徒が主体的に学ぼうとする授業を展開することができると思える。

本研究所においては、言語活動を以下のように定義し、授業で取り入れる言語活動を具体的に構想できるようにした。以下が、言語活動授業プランの項目と作成の手順である。

＜言語活動授業プランの項目＞

「育てたい力」・・・思考力、判断力、表現力、コミュニケーション力
「言語領域」・・・話す、聞く、書く、読む
「学習形態」・・・一人、ペア、グループ、全体

＜言語活動授業プラン作成の手順＞

- | |
|-------------------------------------|
| ① 単元または本時の内容に関する児童生徒の実態と教師の願いを記入する。 |
| ② 児童生徒の「育てたい力」を選択して明確化する。 |
| ③ 「育てたい力」に対して、効果的な「言語領域」を選択して線で結ぶ。 |
| ④ 「言語領域」に適した「学習形態」を選択して線で結ぶ。 |
| ⑤ 線で結んだ組み合わせを記号で記入し、具体的な活動内容を記入する。 |

(P 3 - 9 参照)

(2) 発達の段階に応じた言語活動

言語活動の充実を図るために発達の段階に応じた言語活動を意図的・計画的に指導することを目的にすることが重要だと考えた。「発達の段階に応じた具体的な言語活動」は、小学校低学年から中学生に至るまでに身に付けておきたい3つの言語活動を「具体的な言語活動」、「言語領域」「使用する簡単な話型等」として記載しており、今後さらに内容の充実を図っていきたいと考えている。

発達の段階に応じた具体的な言語活動

言語活動の充実を図るためには、発達の段階に応じた言語活動を意図的・計画的に指導することが重要です。以下に示した発達の段階に応じた具体的な言語活動の言語領域や系統性を意識して「言語活動授業プラン」を作成することで言語活動を充実させることができます。参照：言語活動の充実に関する指導資料（文部科学省）

＜ ・具体的な言語活動 【】言語領域 「」使用する簡単な話型等 ＞

低学年

- ・ 主語と述語（性質、状態、関係など）を明確にして表現する。【話】【聞】【書】
→ 「○○○は、△△△です。」
- ・ 比較の視点（大きさ、色、形、位置など）を明確にして表現する。【話】【書】
- ・ 判断と理由の関係を明確にして表現する。【話】【聞】【書】 → 「○○○は△△だからです。」
- ・ 時系列にそって表現できる。【話】【書】【読】
→ 「まず、○○○。」次に、○○○。」そして、○○○。」最後に、○○○。」
- ・ 互いの話を集中して聞き、話題に沿って話し合う。【話】【聞】
- ・ 書いた物を読み合い、よいところを見つけて感想を伝え合う。【話】【読】
→ 「○○○というところが良いと思いました。」「○○○が分かりやすく良いと思います。」
- ・ 文章の内容と自分の経験とを結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合う。【話】【書】【読】
- ・ 尋ねたり応答したり、グループで話し合っって考えを一つにまとめる。【話】【聞】
→ 「○○○とはどういうことですか」「○○○を詳しく教えてください」「○○○とは△△△です。」

中学年

- ・ 判断と根拠、結果と原因の関係を明確にして表現する。【話】【聞】【書】【読】
→ 「○○○と思います。なぜかという△△だからです。」「その理由は○○○だからです。」



言語活動授業プラン(例)

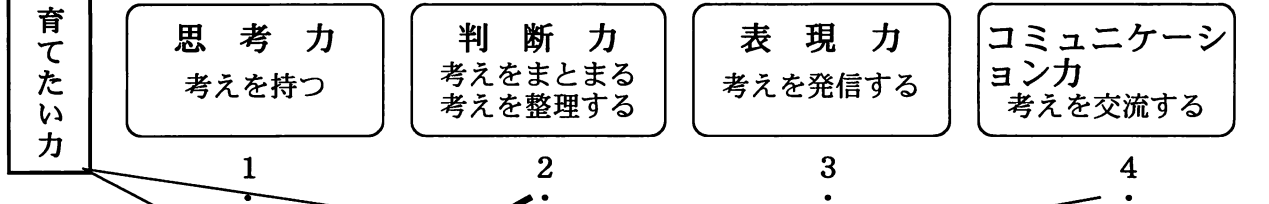
児童生徒の実態

教師の願い

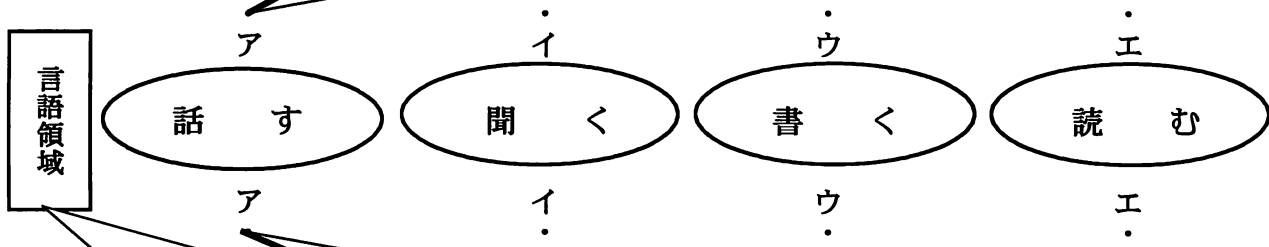
・十進位取り記数法が身に付いていない児童がいる。
・既習事項を活かして答えを予想する、自分の言葉で説明することに対する苦手意識がある。

・実感の伴った学習を行わせたい。
・児童が疑問に思うことやできるようになりたいという解決意欲を高めた上で教えたい。

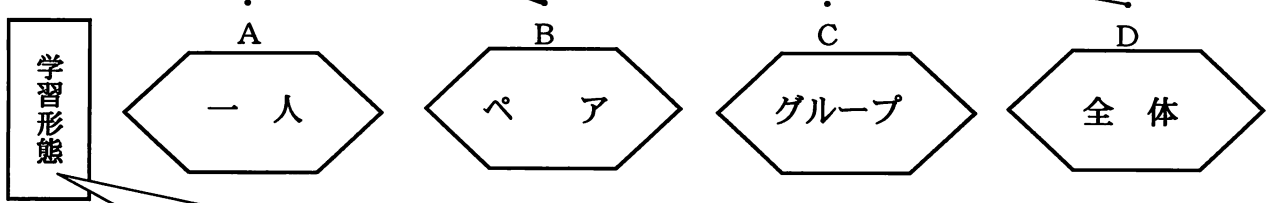
児童生徒の実態と教師の願いを記入する。



単元や本時のねらいに即して育てたい能力（1つまたは2つ）を選ぶ。



育てたい能力に対して効果的な言語領域を選ぶ。



言語領域に適した学習形態を選び、3つを線で結ぶ。

※中心となる言語活動は太実線（—）
※もう一つの言語活動は実践（—）

目標達成に向けた言語活動

プラン	具体的な内容
2-ウ-A	はしたの数の表し方を自分の言葉で考え、ペアで言葉や数直線で説明し合う。
4-ア-D	0.1の10分の1を知り、1、0.1、0.01のいくつ分かを全体で説明する。

線で結んだ組み合わせを記号で書く。

言語領域と学習形態の具体的な活動内容を記入する。

IX 成果と課題

1 成果

- 「学習問題」と「答え」、「めあて」と「まとめ」が対応した、学習指導過程のモデルを作成することで、問題解決的な学習を基本とする『授業モデル』が明確になり、授業の改善が図られた。
- 発問計画を立てることで、授業のどの場面で思考を深めさせるか、また教える部分と考えさせる部分をどのように配分するかなど、効果的な授業の組み立てができるようになった。
- 「学習問題」と「答え」、「めあて」と「まとめ」を対応させた板書を行うことによって、思考の流れや学習の過程が明確になり、学習内容の定着が図られた。
- 言語活動授業プランを作成し実践することにより、授業者の意識が高まり、ねらいに適した言語活動を行うことができた。
- 授業協力員の協力を得ることで、幅広い実践を収集することができ、本研究の成果や課題を明らかにすることができた。

2 課題

- 問題解決的な学習を基本とする『授業モデル』を本市教職員に幅広く浸透させていく必要がある。
- 児童生徒の思考を促し、深める発問の在り方について、さらに研究を進めていく必要がある。
- 教師の指導・改善に生かすための評価の具体的な方法について、研究を深める必要がある。
- 各教科等で、言語活動授業プランや発達の段階に応じた言語活動を幅広く実践する必要がある。

〈参考文献〉

- ・「学習指導要領」 文部科学省
- ・「言語活動の充実に関する指導事例集 ～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～ 【小学校版】」 文部科学省
- ・「社会科固有の授業理論」 岩田一彦 明治図書
- ・「思考と表現を一体化させる理科授業」 猿田祐嗣・中山迅 東洋館出版社
- ・「使える授業ベーシック7 もう悩まない「発問」の仕方がわかる」 使える授業ベーシック研究会 学事出版

〈研究同人〉

事務局

所 長	安野 喜宏	(日南市教育委員会 教育長)
副 所 長	河野 好宏	(日南市教育委員会 教育専門対策監)
事 務 局	佐藤 健一郎	(日南市教育委員会 指導主事)
	柚木山 尚未	(日南市教育委員会 指導主事)
	平川 滋也	(日南市教育委員会 指導主事)

研究員

研究部長	中須 久人	(酒谷中学校 教頭)	
研究副部長	新町 芳伸	(飫肥小学校 教頭)	
主任研究員	西村 賢一	(桜ヶ丘小学校 教諭)	
研究員	小松 秀一	(吾田小学校 教諭)	堀之内 伸浩 (油津小学校 教諭)
	甲斐 裕之	(大堂津小学校 教諭)	神園 寛文 (吾田東小学校 教諭)
	井上 佳代子	(南郷小学校 教諭)	赤池 英人 (油津中学校 教諭)
	山口 由起子	(鵜戸中学校 教諭)	中武 享弘 (北郷中学校 教諭)
	池田 健一郎	(南郷中学校 教諭)	